

# 「日本思想」は、いかに分けて語られるか

水野雄司（倫理文化研究センター専門研究員）

## はじめに

本稿のテーマは、「日本思想」は、どのような「時代区分」によって語られてきたのかを考察することである。

ただし、ここで疑問を感じる人がいるかもしれない。

「時代区分」というのは、前提として決まっているものであり、語る人によって変えられるものなのか、と。

確かに、私たちが日本の歴史を学ぶ時、古代、中世、近世、近（現）代という「時代区分」が、疑いようがないものとして提示されている。

しかしこれは決して自明のものではない。

この区分は、もともと、ルネサンス時代のヒューマニスト（人文主義者。ギリシア・ローマの古典文芸や聖書原典の研究を元に、神や人間の本質を考察した知識人）によって始められたものである。彼らは従来からの古い秩序や理念を否定し、新しい秩序や理念をもつべき時代の開幕として、現在を自覚し、これを近世（モダン・エイジ）とした。そして否定さるべき野蛮な時期が中世であり、中世と異なる、新しきものの理想像を提供したギリシャ・ローマ時代を古代とした。

この三分法は、歴史認識の基本型ともいべきものとなったが、以上のように、非常に明確な意味を持ったものであり、普遍的真理ではありえない。逆に言えば、どのように時代を分けているかを見ることが、どのような意図を以て歴史を見ているかに直結するのである。

こうした観点から、本稿では、大正 13（1924）年から、昭和 8（1933）年までの 10 年間に紡がれた「日本思想」に焦点をあてたい。

大正 13 年とは、日本思想史学確立の立役者である村岡典嗣（1884-1946）が東北帝国大学法文学部教授（文化史学第一講座・日本思想史専攻）に着任した年であり、また「日本精神」を冠した最初の著書である安岡正篤『日本精神の研究』が刊行された年でもある。田中康二によると、この年から七年後の昭和六（1931）年より「日本精神」に関する文献は増加し、昭和八（1933）年に著書・論文ともに刊行数が飛躍的に増大するという。

つまり、「日本」を語る動きのはじまりである。

昭和 8 年の『思想』5 月号では「日本精神」に関しての特集が組まれるが、巻頭論文「日本精神について」を寄せた津田左右吉は、その冒頭で次のように述べている。

「日本精神」といふ語が何時から世に現はれたのか、確かには知らぬが、それがひどく流行したのは最近のことのやうであり、所謂「非常時」の声に伴つて急激に弘まつたものらしく思はれる。

徐々に戦争の火種を感じつつある「非常時」のなかで、「日本」を論じる「思想」が「流行」していく。ただし、こうした「非常時」のただなかにおいて多くの実像は、歪められたひとつのかたちとして

収斂していく。

そこで本稿では、「日本思想史学」の端緒から、「流行」直前までの十年間において、どのような「日本」が語られていたのかを、「時代区分」という視点をもつてみていくことを目的とする。